

## 沖繩・多良間島の土原豊見親伝説

原田 信之

(日本文学)

土原豊見親春源は、第二尚氏王統第三代尚真王(一四七七～一五二六在位)の時代に活躍したとされる宮古諸島多良間島の首長であった。土原豊見親は幼名をウドウルといい、八重山のオヤケ・アカハチの乱や与那国の鬼虎征伐で功をあげた十六世紀に実在した人物である。多良間島には、島を統一したとされる土原豊見親春源に関する伝説が濃密に伝承されている。これら土原豊見親にまつわる諸伝説は、琉球王朝の先島諸島統治をめぐる問題や南西諸島における英雄伝説の問題等を考える際にも重要な手がかりを与えてくれるものと考えられる。

(キーワード……土原豊見親、多良間島、英雄伝説)

はじめに

『中山世鑑』(二六五〇年成立)・『中山世譜』(一七二五年成立)・『球陽』(一七四五年初回編集)等の琉球の正史によれば、琉球の歴代王統は、神話時代にあたる天孫氏時代を除外すると、舜天王統(一一八七～一二五九)以降、英祖王統(一二六〇～一三四九)、察度王統(一三五〇～一四〇五)、第二尚氏王統(一四〇六～一四六九)、第二尚氏王統(一四七〇～一八七九)と続いた。この琉球の歴代王統を日本本土の歴

史と対照させると、舜天王統から第二尚氏王統前期まではほぼ日本の中に世に相当し、第二尚氏王統後期は日本本土の近世に相当する。

これらの王統のうち、本稿では、第二尚氏王統第三代尚真王(一四七〇～一五二六在位)の時代に活躍したとされる宮古諸島多良間島の首長土原豊見親春源をめぐる伝説を中心として扱う。民間伝承の世界における英雄たちの有様は実に生き生きとしており、聞く者の心をとらえてやまない。文献資料からはうかがえない生々しい英雄たちの活躍の有様か

ら、我々は、多くのことを学ぶことができる。これらの民間伝承資料は、史実と虚構の間にあり、資料的位置づけが極めて難しいため歴史的資料とみなすことはできないが、これらの民間伝承の背後には何らかの意味が隠されている可能性がある。しかし、これらの民間伝承は、いずれ消え去る運命にある。採集不可能となる前に、現時点での残存資料の総まとめをしておく必要がある。

宮古・八重山諸島は、一三九〇年（明・洪武二十三年、日本・元中七年）に中山王察度に入貢してから一六〇九年（慶長十四年）の島津の琉球侵入まで琉球王国の統治下にあったとされる。宮古島と石垣島のほぼ中間に位置する多良間島は、面積約二十平方キロのやや楕円形の島である。多良間島の北方約十キロには面積約二平方キロの細長い水納島があり、両島で多良間村（沖縄県宮古郡）を構成している。毎年旧暦八月に行われる豊年祭「八月踊り」は、国の重要無形民俗文化財に指定されている。多良間島では、島を統一したとされる土原豊見親春源に関する伝説が濃密に伝承されている。土原豊見親は、八重山のオヤケ・アカハチの乱や与那国の鬼虎征伐で功をあげた十六世紀に実在した人物である。興味深いことに、多良間島には、土原豊見親の父親「ペーンズ」が平家の流れをくむ人物であったという「平家伝説」がある。<sup>1)</sup>このほか、多良間島には、察度王統（一三五〇～一四〇五）の時代から第二尚氏王統第三代尚真王（一四七七～一五二六在位）の時代以前の間に活躍したと推定されている「嶺間按司（みねまあじ）」という人物の伝説も伝承されている。<sup>2)</sup>これらの伝説は、琉球王朝の先島諸島統治をめぐる問題や南西諸島における英雄伝説の問題等を考える際にも重要な手がかりを与えてくれる。

本稿は、新たに採集した口承資料などの検討を通して、多良間島を統治していたという土原豊見親をめぐる伝説の全体像をまとめ、残存資料の少ない琉球王朝関連伝説の一面を考察することを目的とする。<sup>3)</sup>

## 1 土原ウドウル時代の伝説

土原豊見親春源（ぬたばるとうゆめしゅんげん）は、仲筋集落の「八月踊り」が行われる「土原ウガン」（多良間村字仲筋土原里七〇六）で出生したとされる。多良間島には、春源の父は「ペーンズ」という人物で、平家の流れをくむヤマト（日本）の人であったという平家伝説があり、興味深い。「ペーンズ」と平家伝説の問題は別稿で考察したのでそれに譲り、本稿では「ペーンズ」の子とされる土原豊見親春源をめぐる伝説を中心に考究することとしたい。

多良間島では、土原豊見親春源に関する伝説が濃密に伝承されており、土原豊見親春源という人物が多良間島に果たした影響が極めて大きなものであったことがうかがえる。土原豊見親春源に関する伝説のうち、興味深いのが、幼年時代の伝説である。通常は「宇増呂」と表記される春源の幼名は、『遺老説伝』では「折曾盧」、『雍正旧記』では「おそろ」と表記されており、現在の多良間島の方言では「ウドウル」と呼称されている。まず、多良間島で直接採集した「ウドウル」時代の春源の伝説についてみてみることにする。

〈事例1〉「ウドウルとカッジャンガペー」

幼少の頃から、かなり優れていたみたいで、タラマヤカラーっていつて、征伐したっていう説もあるんですよ。いわれの土地もここにあるけ

どね。すぐ近くに、自然井戸があるんです、今は埋め立ててる。そこに、闘鶏、鶏。幼少の頃ですが。あちこち闘鶏して歩いておって、このタラマヤカラーっていうの、マネをしてるようですが。たちぐつとかエイサーとか、これとかね。そして、怒って、シユガーガーに、塩川の井戸に、自然井戸なんですよ。そしてそこに友だちが、お父さんの所に、駆けて行って。ウドウルというけどね、幼名。

「ウドウルがもう、いじめられてる」と報告したら、その親が駆けてきて、檄（げき）を飛ばしたの。奮い立って、逆に追い返したって。そこにチビガフウっていう、場所があるけどね。征伐したって。征伐したという方がいいかな。ほいでとにかく、懲らしめたそうです。<sup>5</sup>

〈事例1〉はウドウル時代の春源が、タラマヤカラーと呼ばれる人物を征伐したという語りで、島では「宇増呂とカッジャンガペー」として知られている話である。タラマヤカラーとは、ウドウルと同時代に生存していたとされる兄弟をさし、通常は七人兄弟とされる。そのうちの一人がカッジャンガペーという名前であったようである。〈事例1〉を含め、「宇増呂とカッジャンガペー」という話についての島の伝承をまとめると、次のようになる。

ウドウルが井戸（ツガー）の広場で闘鶏をして遊んでいると、タラマヤカラー（の一人のカッジャンガペー）が畑仕事をしていたのでマネをすると怒り、ウドウルを井戸に落とそうとした。争いを見た友だちがウドウルの父（または母）に報告すると親が駆けてきて、逆にやつつけろと激励したため、ウドウルは小刀（または鑿）で相手の尻を突いて殺した。カッジャンガペーはならず者だったのでウドウルは村人に感謝されたという。相手が転んだ場所をウシユンガフー、殺された場所をチビガ

フウ（お尻果報）といい、今も地名が残っている（または、タラマヤカラーのうちの兄弟二人とウドウルが争い、一人はウシユンガフーで殺され、もう一人はチビガフウで殺されたという語りもある）。<sup>6</sup>

ツガーという井戸は津川公民館の近くにある（多良間村字仲筋阿多利間里）。この話に登場するタラマヤカラーに関しては、「宇増呂とタラマヤカラ」という話が伝承されている。それは次のような内容である。

〈事例2〉「ウドウルとタラマヤカラ」

村を荒らし回るならず者の七人兄弟をタラマヤカラといい、彼らはウドウルの怪力を恐れて殺そうといつも機会をうかがっていた。ある日、ウドウルを漁に誘い浜で網をつくろったが、ウドウルは母の乳を飲んでくると言って帰り、つくろいが終わった頃現れた。ウドウルに七人の網を持つように命じたところ、軽々と網を持って泳いだ。大漁になり、帰りには網と七ヒロもあるウブ（魚をぬいたひも）をウドウルに引っ張らせた。ウドウルがウブを引いて泳いでいると、大きなフカが突進してきたが、ペーフシャイー（エイの一種）が飛んできてフカの腹をさいたので、魚とフカを取ることができた。タラマヤカラたちは獲物を八等分せよと難題を告げたが、ウドウルは足で魚を八等分にけり分けたので文句もつけられず、ウドウル殺害計画は失敗した。〈梗概〉<sup>7</sup>

〈事例2〉の話では、ウドウルは子どもであるにもかかわらず怪力の持ち主だったとされていることや、難題を不思議な能力で乗り切るなど、子どもの頃から不思議な能力を持つ偉大な人物として語られている。なお、この、村を荒らし回るならず者の七人兄弟の名前について、「タラマヤカラ」ではなく、「ナケーヤカラ」という七人の兄と一人の娘であったという伝承がある。<sup>8</sup> 話の内容がほぼ同じであることから、「タラマ

ヤカラ」と「ナケーヤカラ」は同じ七人兄弟を現しているとも推定されるが、詳細は不明である。

琉球王府統治時代には、多良間島（仲筋村・塩川村）と水納島（水納村）は宮古島に属していた。一八八二年（清の光緒八・明治十五）の多良間島（間切）は三カ村（仲筋村・塩川村・水納村）で、戸数五〇二・人口二八二五であった。一九〇八年（明治四十二）の沖縄県及島嶼町村制施行に伴って間切制は消滅し、多良間三カ村はそれぞれ字となって平良村に所屬したが、一九一三年（大正二）に分村して多良間村となり、現在に至っている。現在の多良間村は、多良間島に字仲筋と字塩川、水納島に字水納の各集落があるが、水納島の水納には一家族が居住しているのみ（二〇〇四年九月時点）である。多良間間切が仲筋村・塩川村・水納村の三カ村となる以前には、多数の古代集落が点在していたと伝承されている。『多良間村史 第一巻』には、「集落形成の上では、伝説によると、アマガームラ、パリマムラ、フタツガームラが在り、排他的で相争っていたとされているが、一説では、アマガール周辺の集落をアマガームラ、アダリマガール周辺の集落をアダリマムラ、ナガシガール周辺の集落をナガシガームラと呼び、総称してナカスズムラと呼称し、一方、パリマガール周辺の集落をパリマムラ、シユガール周辺の集落をウブンガームラ、カデイカリ周辺の集落をスガムムラ、フシャトゥガール周辺の集落をウプキムラと呼び、総称してウブシユガームラと呼称したとも伝えられている」と記されている。多良間島では、ウドウルの時代にはアマガール村、パリマ村、フタツガール村があり相争っていたが、アマガール村のウドウルがそれらを統一したと伝承されている。これらを現在の多良間島の集落で考えると、おおまかに、アマガール村が現在の仲筋集落、パ

リマ村（またはウブシユガームラ（大塩川村））が現在の塩川集落とみてよいであろう（フタツガール村は廢村。ただし、パリマガール周辺にあつたパリマ村は現在の塩川集落へ強制移転させられたという伝承がある。現在の塩川集落は一説の総称ウブシユガームラと重なる部分が多い）。〈事例1〉〈事例2〉で語られているウドウルとタラマヤカラーたちとの争いも、当時の勢力争いを反映した伝説とみることができる。次に、島で直接採集したパリマ村との争いを語る話を示す。

〈事例3〉「ウドウルとパルマウプトウヌ」

パルマガール。パルマウプトウヌ（波利真大殿）というのはあの井戸を中心にして生きたわけですよ。パルマタマシヤラというのは。うちはとまったようですけどねえ。池の形もあつたというから—今はパル、間（あいだ）と書いてるけど。波（なみ）を使つてははずたぶん、今は—。すぐ近くあの井戸の近くに、宅地はあつた。だから、ウプトウヌ。これパルマというのは名前全部。それからきたのが名前じゃないですか、そつちも、小字も。

（女の所に通つたのは）これはその人じゃなくてその子ども。名前はいいですがね。これは、土原豊見親（ぬたばるとうゆめ）の策で、自害してゐるんですよ。言葉はね、「プツフトマサア、シナマツ」という言葉もあります。これはあの、フタツガール村の女なんです。フタツガール村の伝えは、ハンセン病の、集落だといわれてゐるんですが、土原豊見親は、パルマウプトウヌ（波利真大殿）に、

「あんたの子どもは、向こうの女とかかわつてる」。それを聞いたウプトウヌは、

「何で自分の子どもに限つて」。向こうの、ハンセン病だと言われている

からね。これを待ちかまえたそうです、帰りを。だからもう、刀を抜いて。親に殺されるよりは自分でこの男自害したと。親には殺される必要のない自害した。これは、自分のうちで一緒に遊んでるんですよ、子どもとは。自分の親に切られるよりは自分で。わけわからんわけですよ、子どもは。

豊見親はもうこれで、勝ったも同じさ。頭も優れていたんじゃない、豊見親。もう伝承は、豊見親だったら、大小だいぶあるけどね、豊見親なんてのは伝承は<sup>11)</sup>。

〈事例3〉は、ウドウルとパルマ村の首長パルマウプトゥヌとが争った際、パルマウプトゥヌがウドウルの計略にかかって自分の息子を殺そうとし、息子は自害したという話である。パルマガーは塩川御嶽（現在の多良間村字塩川波栄真二〇一九）の近くにある井戸で、近くにパルマウプトゥヌの屋敷跡とされる場所もある。パルマ村はパルマガーを中心とした集落だったようである。ウドウルとパルマ村の首長パルマウプトゥヌとの争いについて、〈事例3〉を含めた島の伝承をまとめると、次のようになる。

青年になったウドウルは村の統一を考え、パルマ村のパルマウプトゥヌ父子の仲をさいて勢力を弱めようと思った。そして、パルマウプトゥヌに、息子がフタツガー村の患者の娘と恋仲になっていると告げた。それを聞いたウプトゥヌは息子を殺そうとしたが、息子は自分の親に切られるよりはと自害した（または、ウドウルがパルマウプトゥヌに息子の夜の行動を確かめてみよと言い、次にウドウルは息子を遊びに誘い、息子がフタツガー村に通ってきたとパルマウプトゥヌに思わせる。パルマウプトゥヌは夜半過ぎに帰ってきた息子を殺そうとしたが、息子は自分

の親に切られるよりはと自害した<sup>12)</sup>。

この、ウドウルとパルマウプトゥヌとの争いの話には続きがあり、島では次のような話が伝承されている。

〈事例4〉「水納ペーンズの刀とウドウル」

片腕の息子を失ったとはいえパルマウプトゥヌには大勢の家臣がいるため、ウドウルは水納島を統治していたおじの水納ペーユヌス（ペーンズ）のところへ相談に行った。水納ペーユヌスは庭で網の修理をしていたが、ウドウルの話を聞くと網の修繕用の小刀を渡してこれを持っていて戦えと言った。困惑したウドウルが小刀を返すと、水納ペーユヌスは笑いながらニワトリを集め、小刀を投げて手をたたくとニワトリがばたばたと倒れて死んだ。驚いたウドウルはその小刀をもらって帰り、パルマ村を攻め、多良間を平和な島にした。〈梗概<sup>13)</sup>〉

〈事例3〉と〈事例4〉の内容から、ウドウルはパルマ村を倒すため、まず、パルマウプトゥヌの息子（優秀な人物であったとされる）を策略によって殺し、次に水納島を治めていたおじの水納ペーンズ（ペーユヌス）の助けを借りてパルマウプトゥヌの本隊を滅ぼしたと伝承されていることがわかる。不思議な小刀の存在が語られるなど、伝承される過程で、ウドウルの活躍が面白く物語化されていた様子がかげえ、興味深いものがある。〈事例4〉の伝承は、ウドウルの戦いに、おじの水納ペーンズが水納島から援軍を派遣（または武器を援助）したことを反映した伝説とも推定され、注目される。

〈事例3〉〈事例4〉のように、多良間島ではアマガー村のウドウルとパルマ村のパルマウプトゥヌが戦ったと語られる場合のほか、次の話のように語られる場合がある。

〔事例5〕「土原豊見親と塩川との戦い」

土原豊見親と、またその塩川ガ―に祭つてある神と、やっぱり、戦争もやったという話は、ある。して、こちらにある、その時に、こちらからは、もう、仲筋のもの、ここからは塩川のものだよというふうには、あの岩があるよ、現在。あまり大きな岩じゃないんですが。して、ここまで、戦つて、追われてきたらしい、攻められて。すぐそこにある、運動場から。してきて、豊見親は、その岩の上に座つて、もうこちらからは動かんと、いうふうにして、こちらに戦つて、もう勝ち負けが決まつて、こちらから西の方はもう仲筋、東は塩川というふうにしたという話もあるんだが、その通り、そういうふうに分けられているさ。確かに、当時は、そういう戦争もあつたんだなあと考えられるんだが。小学校の運動場の、東の方に道路があるですよ。ずうつと南の方に行つたら、そういういわれの石がある。

〔事例5〕は、土原豊見親と塩川ガ―に祭つてある神との戦いがあり、勝ち負けが決まつて、岩を境にして、西の方は仲筋、東は塩川としたという話である。多良間小学校近くの個人宅に現在もその岩があるということであつた。現在の島の伝承では、〔事例3〕〔事例4〕のようにアマガ―村のウドウルとパルマ村のパルマウプトヌが戦つたと語られる場合のほか、仲筋村のウドウルと塩川村のパルマウプトヌが戦つたと語られる場合もあるので、〔事例7〕の「塩川ガ―に祭つてある神」は、「塩川御嶽」を祭り始めたこととされる「パルマウプトヌ」のことと推定される（塩川ガ―の祭神は未詳）。この話では、岩を境にして、西の方は仲筋、東は塩川としたと語られているわけであるが、西の仲筋地区と東の塩川地区との勢力争いの一端がうかがえ、興味深い伝承といえる。

このようにしてウドウルはパルマ村を倒したわけであるが、水納島はおじの水納ペーンズが統治して攻める必要がないため、次にウドウルが倒す必要のある村は、〔事例3〕にも語られているフタツガ―村とすることになる。この、ウドウルとフタツガ―村との争いに関しては、次のような話が伝承されている。

〔事例6〕「ウドウルと闘牛」

昔、アマガ―、パリマ、フタツガ―の三村は、毎年夏の収穫後、アマガ―村で対抗の闘牛大会を行い、負けた牛はその場で食べるならわしだつた。近年はフタツガ―村が連勝し、負けた二村の人たちが我慢できないくらい威張つた。その年もフタツガ―村が勝つて威張りだしたので、ウドウル少年が立ち上がり、自分が牛の相手をすると言つた。大人たちは笑つたが、牛との戦いは始まり、ウドウルはフタツガ―村の牛を地面にたたきつけた。ウドウルがフタツガ―村の人たちの前に行つて牛を食べてよいか念をおすと、怪力におびえた人たちは頭をさげた。〔梗概〕

〔事例7〕「ウドウルとイグントリナツ」

フタツガ―村の首長はイグントリナツといい、いつもイグン（鋸）を七つ持つて漁に出るのでこう呼ばれていた。ウドウルはフタツガ―村を攻める日を、村人全員が漁に出て楽しむ日であつた三月三日に決めた（ウドウルがフタツガ―村の妾（あるいは子守）から情報を聞き出して日を決めたという語りもある）。三月三日、ウドウルは村民全員が漁に出た頃忍び込み、留守の家々に火をつけて回つた。人々があわてて村に戻ろうとしたが、村に通ずる道は一本の細道だったので一列になり、曲がり角で待ち伏せていたウドウルが一人一人を斬つた。イグントリナツも同様に斬ろうとしたが、ウドウルの刀をイグンで受け止めた。その

後、二人の戦いが海中でも続いたが、ついにイグントリナナツが降伏した。ウドウルはイグントリナナツに部下たちとアマガー村に引越すように命じ、フタツガー村は廢村になった（ウドウルが村民全員とイグントリナナツを殺してフタツガー村は廢村になったという語りもある）。

〔梗概〕<sup>(6)</sup>

〔事例6〕と〔事例7〕はフタツガー村とウドウルとの争いを語る話である。フタツガー村は、多良間島の西側にあつたとされる廢村で、現在の新多良間空港あたりにあつたとされる。フタツガー村の跡には、フタツガーという井戸の跡がある。〔事例6〕や〔事例7〕の話から、ウドウルの時代にはそれなりの勢力を持つ特殊な村であつたことがうかがえる。語りから、〔事例6〕の鬪牛の話はウドウルの少年時代の話で、〔事例7〕のイグントリナナツとの戦いの話はウドウルが青年になつてからの話のように思われる。

〔事例4〕のパリマ村との戦いと、〔事例7〕のフタツガー村との戦いの先後関係について、『多良間村史 第一巻』には「パリマ村との戦いの前に、宇増呂はフタツガー村の主長、イグントリナナツを降伏させていた」とある。その伝承が事実だとするなら、ウドウルはフタツガー村のイグントリナナツを降伏させた後、フタツガー村の村民がアマガー村に完全に引越す前までの短期間の間にパリマ村との戦いを行ったことになる。事実は不詳であるが、ウドウルが比較的短期間に島内統一を行った様子がうかがえる伝承の存在は、興味深い。

以上、島の伝承をとおして、アマガー村のウドウルが多良間島の村々を統一していった様子をみたわけであるが、文献資料にもウドウルの戦いの様子が記されているものがある。首里王府編『琉球国由来記』（一

七一三年成立）卷二十には、多良間島の運城御嶽と泊御嶽の由来として次のような話が記されている。

二嶽ノ由来。昔物語、多良間島伊知ノアジト申人女房ヲバ、ホナマヤト云フ。夫婦共ニ慈悲正直ヲ宗トシテ、平生、仏神信仰アリ。或時、夫婦列ニテ人数余多相催シ、嶺間ト云フ所へ耕作ニ出ケルニ、四海浪上リ、召列ノ者潮波ニ引流サレ行方シラズナリニケル。伊知ノアジ夫婦計生残りケル。是偏ニ、慈悲正直故天ノ恵ニテ可有之ヤト、島中致感嘆也。其後、三人ノ子ヲ儲ケル。男子ヲバ土原大殿ト名付。女子二人アリ。姿形モヤサシク、姉ハ、多良間島一方ノ主ハリマ大殿女房ニナル。妹ハ、水納島主ヨノヌシ女房ニナル。彼土原大殿孫ヲソロト申者、若年ノ比ヨリ敬老愛幼ノ志深ク、朝夕、天ヲ拜ス。或時、運城・泊嶽両所ニ神靈光リ輝キ天降リタマフヲ、彼ヲソロ、拜ミ始メ崇敬ス。其比、塩川村ハリマニキヤモヤトテ、惡逆無道ノ者アリ。ヲソロ、何事ニツケテモ、人ニ抽デケル故、イカニモシテ可害ト、隱密ニ人勢ヲ相催スヨシ、ヲソロ方ニ聞得ケレバ、多勢ニ無勢叶間敷ト、偏ニ運城・泊嶽ノ神ノ擁護ヲ奉仰ケル。其時、ヲラチトノマシラベト申七歳成女童ニ神託アリケルハ、タトヘ、ハリマニキヤモヤ大勢ナリトモ、土原ノヲソロハ神信仰深キモノナレバ、彼逆賊輒可致退治ト、示現ヲ拜ミ、ヲソロ心安ク罷有ル処、ハリマニキヤモヤ、大勢ニテ、ヨシカト申ス里ヲ散々ニ踏破リ通りケル。彼里人共立腹イタシ、四方ヨリ相囲ミ防戦ス。此勢ヒニ力ヲ得、土原ノヲソロ、後ヨリ責寄せ、ハリマニキヤモヤ一類不殘討取タルトナリ。誠是、神ノ加護故ト弥崇敬イタシタルト也。（傍線原田）<sup>(8)</sup>

この話は「ヲソロ」（ウドウル）が運城・泊嶽両所を拝み始めたことを記してあるわけであるが、内容は前半と後半に分けることができる。前半にはウドウルの出自が描かれている。この話によると、多良間島の「伊知ノアジ」と妻「ホナマヤ」が嶺間へ皆と耕作に出た際に大波が来たが、夫妻のみ助かり、その後三人の子に恵まれた。男子は「土原大殿」と名付け、姉は多良間島一方の主「ハリマ大殿」の女房に、妹は「水納島主ヨノヌシ」の女房になった。そして、土原大殿の孫「ヲソロ」が運城・泊嶽両所を拝み始めたことと記されている。なお、筆者は土原豊見親春源（幼名ヲソロ）の血統について、この『琉球国由来記』に加え、『雍正旧記』、『遺老説伝』、『土原豊見親ぬニイリ』、島の伝承等から類推し、春源までの血脈は、

伊知ノアジ―土原大殿：平屋西―ヲソロ（土原春源）

となると推定した。<sup>19</sup>

この『琉球国由来記』の記述の後半には、ウドウルが塩川村の「ハリマニキヤモヤ」と争い、一味を残らず討ち取ったことが記されている。ウドウルが運城・泊嶽両所を拝み始めた頃、塩川村に「ハリマニキヤモヤ」という悪逆無道の者がいたので征伐しようとしたが、多勢に無勢でかなわない相手であった。ひたすら運城・泊嶽の神に祈願すると、「ヲラチトノマシラベ」という七歳の女童に神託があり、たとえ劣勢でもウドウルがあつた逆賊を退治するとの示現があつた。ハリマニキヤモヤが大勢でヨシカという里を散々に踏み破つて通つたので里人たちは立腹し、四方から囲んで防戦した。この加勢に力を得たウドウルは、後から責め寄せてハリマニキヤモヤ一族を残らず討ち取つたという。

ここの「塩川村ハリマニキヤモヤ」とは、〈事例3〉〈事例4〉でみた

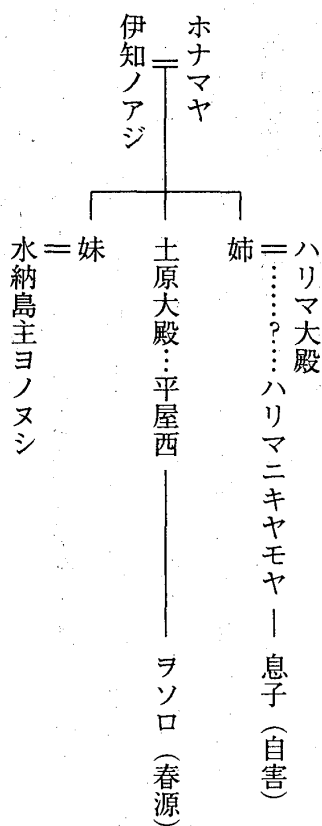
パルマ村の首長パルマウプトゥヌのこととみられ、『琉球国由来記』に記述された戦いは〈事例3〉〈事例4〉でみた戦いと同一戦いについて記したものと推定される。今から約五百年前の戦いを約二百年後に記した伝承が『琉球国由来記』の記述で、それからさらに約三百年後の伝承が〈事例3〉の現在の語りということになる。〈事例3〉〈事例4〉の現在の語りではウドウルは自らの智慧の力とおじの水納ペーンズの援助でパルマウプトゥヌを征伐したとされるが、『琉球国由来記』の記述ではウドウルはシャーマンとみられる女兒の神託とヨシカの里人たちの加勢で「ハリマニキヤモヤ」を征伐したとされている。両者とも、第三者による援助があつたことを述べていることから、実際の戦いにおいても同様の第三者による援助があつた可能性が高いように思われる。注目されるのが、『琉球国由来記』では「神の加護」（シャーマンの神託）が述べられているのに対し、現在の語りではウドウル自らの「智慧の力」を述べている点である。この差異は、島の人々の心意や考え方の変化が関係しているであろうか。数百年を隔てて同じ事件を語つた両者の記述からは、種々のことが読みとれ、興味深い。

なお、この『琉球国由来記』の記述で注意が必要なのが、人名の問題である。時代が近い『琉球国由来記』の記述が正しいとして考察を進めた場合、「パルマウプトゥヌ」に関する現在の島の伝承に乱れがあるらしいことがわかる。本文の前半の記述から、「伊知ノアジ」と妻「ホナマヤ」の三人の子のうち、姉が「ハリマ大殿」の女房になったとあるから、二重傍線部の「ハリマ大殿」と「ハリマニキヤモヤ」は世代も違う別人（およそ一世代違う）であることがわかる。「大殿」は、島の言い方では「ウプトゥヌ」なので、『琉球国由来記』の「ハリマ大殿」の読



み方は「ハリマウプトゥヌ」となり、「パルマウプトゥヌ」と同じとみてよいであろう。〈事例3〉〈事例4〉などのような現在の語りではウドウルは「パルマウプトゥヌ」と戦ったとされるが、『琉球国由来記』の記述が正しいとした場合、ウドウルは「パルマウプトゥヌ」とは別人の「ハリマニキヤモヤ」と戦ったことになり、人間関係が一世代ずれて伝承されていることがわかる。つまり、ウドウルは「パルマウプトゥヌ」の孫の世代の人物を策略にかけて自殺させ（事例3）、「パルマウプトゥヌ」の子の世代の「ハリマニキヤモヤ」を戦いでやぶった（事例4）、ということになる。

なぜこのような伝承の乱れが生じたのであろうか。一つの可能性は、伝承の過程で、あまり知られていない「ハリマニキヤモヤ」の名が著名な「パルマウプトゥヌ」に置き換えられたことが考えられる。もう一つの可能性としては、「パルマウプトゥヌ」の子の世代にあたる「ハリマニキヤモヤ」が、同名の「パルマウプトゥヌ」を名乗った場合が想定される。その場合は、「パルマウプトゥヌ」と「ハリマニキヤモヤ」は親子の関係であった可能性が高くなるが、資料不足でよくわからない。これらの人間関係を簡単に示すと、次のようになる。



これらの人間関係のうち、もう一つ問題となるのが、『琉球国由来記』の「水納島主ヨノヌシ」と〈事例4〉の「水納ペーユヌス（ペーユス）」との関係である。原田はかつてこの問題に関して、関連資料がないため事実関係は不明とことわったうえで、水納ペーユヌスは「伊知ノアジ」の三子の中の妹と「水納島主ヨノヌシ」の間に生まれた娘に婿入りし、水納島を統治した可能性を考えてみる必要があると指摘した。<sup>20</sup> その場合、水納ペーユヌスはヲソロ（春源）のおじとなり、現在の伝承と一致することになる。この問題は資料の壁に当たるので解決は困難であるが、今後とも考究してゆく必要がある問題の一つといえよう。

## II 島内統一後の土原春源伝説

では次に島内を統一した後の土原豊見親春源にまつわる伝説についてみてみることにする。ウドウルは成人して土原春源を名乗り、琉球の歴史でもよく知られている宮古島のオヤケ・アカハチや与那国島の鬼虎の征伐軍に参加し、名声を得てゆく。

### 〈事例8〉「土原春源のアカハチ・鬼虎征伐」

アカハチを征伐に行ったのは、これは、アカハチを征伐に行った時に、首里王の命令に従わないと何とかで、首里王の。宮古の仲宗根豊見親（なかそねとうゆめ）に、

「あんたが征伐してくれ」ということで、行って征伐したというんですね。それで、向こうを征伐して、帰ってきた。もちろんその時も、仲宗根豊見親が総大将で、多良間の土原豊見親（ぬたばるとうゆめ）も行ってらるんですね。けど、さほどの手柄もなかったのか、そういったよ

うなことで、伝えは聞いてないんですけど。

それから十年後に、八重山の、与那国の、鬼虎を征伐に行ってるんですよ。ちょうど十年後にですね。すると、多良間の土原豊見親が、十年前に、オヤケアカハチを退治に行った時には、(鬼虎は)まだ子どもであつた、まあ幼少であつたということですね。けど十年後にはもう向こう、与那国に渡つて、与那国の頭首になっておつたと。それで、手柄を立てたと。(鬼虎を)討ち取つたのは、土原春源だというふうに。まあ伝えですよ。それで、土原春源が、討ち取つて、仲宗根豊見親が、殺されようとしておつたつてよ。田んぼのあたりの、あぜ道に、追い詰められて、殺されようとしてるのを、土原春源が、救つたと。相手を、打ち殺したという、伝説、まあ言い伝えですが。この、鬼虎は、向こうでは、与那国では、氏神として現在祭られている。それで、年貢物を納めて、持ち帰る時に、船こぐ連中が、どっかに、流したみたい。これが二三年続いたみたいですね。それで、首里王は、自分に、盾突いていると。まあ、海賊に遭つたとか何とかで、向こうでは返事してるということ、それをまあ、信じて、征伐したということもあるんでしょうね。それで、与那国の人は、現在も、氏神として祭っているみたいですけど、多良間の、鬼虎とか何とかという人も、聞いても、あまりいい感じじゃないみたい、な話ですけどねえ。鬼虎を征伐したのは多良間の、豊見親だから、ということ、あんまり。そういうなこと、みたいですねえ現在でも。まあそういうな話は聞いてますけれども。まあこれは、史実はどうだったかは分からないですけど、言い伝えがそうなっているんすよ。記録がないんですよ。文書に残ってないんです。ただ、あの、組踊をやってる、ということも、これは多良間の役人が、寄り集まつて、これであ

の、土原春源の手柄みたいなのを、書いたんじゃないかと。まあいえば、そういうような、あれはなかったと思うんですけど。もうあんまり、知りはないけど、そういうな話ですね。<sup>21</sup>

〔事例8〕は宮古の仲宗根豊見親に参加を依頼された春源がオヤケ・アカハチを征伐に行き、十年後にも与那国の鬼虎を征伐に行つて手柄を立てたという語りである。春源はオヤケ・アカハチ征伐の時はあまり目立たなかつたようだが、鬼虎征伐の時は追い詰められて殺されようとしていた仲宗根豊見親を助け、さらに鬼虎を討ち取つて手柄を立てたという。現在、言い伝えに基づいた組踊をやっているが、史実はどうだったかは分からないとのことである。多良間島で調査すると、春源のオヤケ・アカハチ征伐の話はあまり聞くことができないが、春源の鬼虎征伐の話はよく聞くことができる。これは、多良間島で毎年行われる八月踊りの演目の中に、春源の鬼虎征伐の様子を描く組踊「忠臣仲宗根豊見親組」があることと無関係ではないと思われる。

〔事例9〕「土原春源と首里王」

(春源は)帰つて来て、多良間の豊見親(とうゆめ)になつてるんですがねえ。豊見親になつて多良間を統治しなさいと、いうことで。それで、多良間でまた言い伝えられてるのは、首里、沖繩まで出て、首里まで行つて首里の王の、壁が、塀があるでしょう。宝剣治金丸(ほうけんじかねまる)といつて、太刀。この太刀を、その、中に入れないもんだから、道路から、投げて、城内に投げて。そいつを取つて、首里王も喜んで、多良間の豊見親に命じたとか何とかという話もあるんですよ、そういうのが。<sup>22</sup>

〔事例9〕は、鬼虎征伐で手柄を立てた春源が首里王に会つて多良間

の豊見親になって多良間島を統治するよう命じられたという語りである。(事例9)には、首里に行った春源が太刀を道路から城内に投げ、それを取った首里王が喜んだという部分がある。「宝剣治金丸」は、仲宗根豊見親玄雅が尚真王四十六年(一五二二)に尚真王に献じたものとして有名な宝剣であるが(『球陽』)、多良間にも春源がらみの話として宝剣治金丸にまつわる伝承があるようである。宝剣治金丸は著名であることから、この宝剣にまつわる何らかの伝説が宮古諸島各地に広く語られてきた可能性を示すもので、興味深い。

多良間島では、鬼虎を討った仲宗根豊見親と土原豊見親が首里王に戦勝報告のため拝謁した時の話として、「仲宗根豊見親が与那国から帰つて、首里城の庭で国王を拝謁した際、国王はすでに土原の鬼虎討ちを知っていた。というのは、土原が与那国から投げた槍が首里城の庭に先に到着していたからである」という伝承がある。この話では、仲宗根豊見親が鬼虎を討つたとされるが本当は土原豊見親が討ち、土原が与那国から投げた槍が首里城の庭に先に到着していたので、国王は土原の手柄をいち早く知ったという内容となっている。

歴史上ではどうだったのであろうか。『球陽』卷之三の尚真王二十四年(一五〇〇)の「始メテ多良間島主ヲ置ク」の項には「宮古山ノ土原豊見親、マタ仲宗根豊見親ニ跟随シテ、八重山ヲ征伐シテ、功ヲ成シテ凱旋ス。是レニ由リ、聖主深ク之レヲ嘉獎シ、遂ニ土原豊見親を擢ンデ、多良間島主ニ陞為シ、称シテ豊見親トナス。」と記されている。この記述から、土原春源が尚真王に八重山征伐の功績を認められ、正式に多良間島主として豊見親職に任命されたことがわかる。尚真王二十四年(一五〇〇)はオヤケ・アカハチが征伐された年であるが、鬼虎征伐

の年については諸説がある。

(事例10)「土原豊見親(抱護林、屋敷跡、碁盤目道路)」

土原春源(ぬたばるしゅんげん)は、向こうに、向こうの踊り場です。ね、こちらが舞台で、西側のの方に、拝所があるんです。ひつついてますけど。向こうに、土原春源が祭られておつて、そして後ろの方に、北側のの方に、お父さんの、拝所があるんです。土原春源のお父さん。多良間の村落が、一箇所に、まとまっているというのは、土原春源がですね、島全体四五箇所ぐらい、部落があつたらしいんです。へで、部落同士の争いが絶えないと、いうことで、各部落を平定してこれを一箇所にまとめた。そして、部落の周方に抱護林(ほうごりん)といって、抱護林ですね、木が植えてあるんです。これから外に、家を造っちゃいけないと、いうことでこうまとめたということですね。

向こう(土原ウガン)が、屋敷跡だといつてるんです。それで、父の北側の側にあるし、前の方に持つてきて、土原春源は、祭られていると、いうことになっているようです。あれはですね、一番西側の方が——三つあるでしょう——、西側のの方が、土原春源で、東側の方は天の神様だと。それで、真ん中は、ナカドリの神様。土原春源と、天との、仲をとるみたいなのかなあ。そういう言い方、伝え方しているんですね。

その後には、村の平定をして。多良間の道路はだいたいあの、曲がりくねった道路はないんですよ。そういう風な、道路の、まあ。これ、小京都、小さい京都だとよくいう。最近もこう、学者なんか、言ってますけど。碁盤の目のように、作られているらしいですね。(土原春源が)考えて作られてね。

〈事例10〉は、土原春源の業績の数々についての語りである。島全体で四五箇所位の村落があったのを春源が平定して一箇所にとまとめたこと、まとめた集落の周囲に抱護林を植えてその外に家を造るのを禁じたこと、仲筋地区の八月踊りの踊り場になっている土原ウガンが春源の屋敷跡でそこに春源やその父たちの拝所があること、春源が考えて作った多良間の道路は京都のように碁盤目道路となっていることなどについて述べている。

仲筋・塩川集落の周りを囲んでいる並木を抱護林といい、今でも字仲筋宮良区郊外トウカバナ山から字塩川の白嶺山まで約一・八キロ、樹高六〜七メートルの並木（フクギ・テリハボク・モクタチバナ等）が続いており、素晴らしい景色を觀賞することができる。島の伝承では、春源が抱護林を植えてその外に家を造るのを禁じたとされているが、実際は春源より後代の蔡温（一六八二〜一七六一）の林政施策によるものであろうとされている。<sup>26</sup>〈事例10〉の語りから、十六世紀に島を統治したとされる春源が、現在に至るまで多良間島に大きな影響を与え続けていることがうかがえる。

#### 〈事例11〉「ピトマタウガン」

春源の、家内というんだけど、二号だか何か知らないですね。それで、春源は、向こう、今、踊り場でしょう。向こうの、踊り場。向こうに家はあつたらしい女の家は。へでそこを、ひとまたぎで歩いたと、いうふうな感じで、ピトマタウガンっていつてるんですね。春源の話はもうたくさんあるんですけど。これはもう、言い伝えたからよ。<sup>27</sup>

〈事例11〉は、塩川地区の八月踊りの踊り場になっているピトマタウガンの由来についての語りである。ピトマタウガン（多良間村字塩川大

道里三八三）は春源の妾の屋敷跡で、春源が自分の屋敷（字仲筋の土原ウガン）からそこまで一股（ピトマタ）で通ったというのでピトマタウガンと呼ばれるようになったという。ピトマタウガンについて島で調査すると、ほとんどの話者が春源の妾の屋敷跡と聞いてると語ってくれるが、それ以上のことはよくわからなかった。『多良間村史 第六巻』「ピトマタウガン」の項に、「豊見親は多良間島を統一した時に、最も強

力に抵抗した塩川村を征服し、強制的に現在の字塩川の位置に移住させたとされている。強制移住させられた人々が心底から服従していると思われぬ時期に、側室を住ませたであろうか。表面上は側室の住居としながら、実は腹心の部下が目付役として住んでいたのではなかったかとの見方もでてきている」と記されているように、側室の屋敷跡であったという伝承に対して島内でも疑問説がでていことがわかる。

ところが、島にはかつてこの問題に関する興味深い伝承があつたようである。先にみた〈事例2〉「ウドウルとタラマヤカラ」のところ、村を荒らし回るならず者の七人兄弟について、「タラマヤカラ」ではなく「ナケーヤカラ」という七人の兄と一人の娘であつたという伝承があることを述べた。その「ナケーヤカラ」についての伝承に、「一又御拝（ピツマタウガン）の近くにナケーヤカラという七人の兄と一人の娘がいた。その娘を豊見親がめとろうとしたところ、ある日、七人の兄たちに、パナリという所に網を持つて魚獲りに連れて行かれた」（中略。この部分に〈事例2〉とほぼ同内容の話が入る）「娘はのち、豊見親の妾となる。また、ピツマタウガンのピツマタというのは、「自分の家から娘の家まで一またぎぐらいだ」といつた所から来ている」という部分がある。これは約半世紀前の一九六〇年頃に上江洲均氏が調査して記録し

た貴重な伝承である。

もちろん、あくまでも一伝承ではあるが、この伝承が正しいと仮定すると、春源の側室は自分の実家の近くに住んでいたことになり、その実家は「ナケーヤカラ」と呼ばれた七人の兄と一緒に住んでいた家であったことがわかる。春源は島内全域を統一したわけであるから、ナケーヤカラたちも配下に治めたとみてよいであろう。ナケーヤカラたちの妹が側室になったと仮定すると、ナケーヤカラたちは春源側についてと考えられるので、「強制移住させられた人々が心底から服従していると思われない時期」であつても、逆に兄たちは妹とその相手（春源）を守ろうとするのではないであろうか。そういう視点から見ると、ピトマタウガンは春源の妾の屋敷跡で、その女性はナケーヤカラたちの妹だったという伝承は、島内統一をめぐる権力闘争の中で起こった一つの逸話として何かりアリティのあるものに感じられてくる。もちろんこれらはあくまでも伝説にすぎないが、春源の島内統一過程の一端を想像させてくれる興味深い伝承といえよう。

〈事例12〉「土原豊見親とガジュマル」

ピトマタとは一個をいうわけ。ピトマタ、一個。だから、あんまり向こうはわからんけど、うちの実家にね、大昔からガジュマルがあつたの。ガジュマルがあつて、この豊見親が、向こうが何か兄弟みたいだから、あつちに行つて、暑いから、ガジュマルの枝を、こう左へこうして日がきをして、土原に帰る途中に、うちの実家のこつちにこうしてガジュマルがもう枝もあれこれしてあつたものの、この豊見親が、ちょっと休んで、自分がこうしてピトマタから持ってきたガジュマルの枝を、ここにもう、すぐ近いから、土原は近いから、そこに差し込んで、帰られたと

いう伝説がある。だけどこの木は、下にうちなんかは、お酒をあげたりして祭つておつたけど、もう倒れてないの台風に。ものすごい木だったけど。もう倒れてないの。影も形もない。仲筋です。土原ウガンの近くよ。うちの実家だよ。こういう伝説を聞いたの。向こうピトマタから、兄弟の家に行かれて、帰りに、暑いから、帽子代わりに枝を折つて、ガジュマルの枝を折つて、頭を日がきして、いらつしゃつてちよつと休んだつて。して、もうすぐ見えているから土原ウガン。もう、いらないと思つて差し込んだんじゃない。このガジュマルだったつて。倒れてないよ、もう。長年あつたから。もうないの。<sup>(30)</sup>

〈事例12〉は、土原豊見親春源が日よけにしたガジュマルの枝が、大木になつて近年まであつたという語りである。春源がピトマタウガンから自分の家（土原ウガン）に帰る途中、暑いので帽子代わりにガジュマルの枝を折つて日よけにし、家が近付いたので枝を土地に差した。そのガジュマルの枝が大木になつて仲筋の土原ウガンの近くに近年まであつたが、台風で倒れて今は影も形もないという。そのガジュマルの大木が倒れる前は、すぐ近くに住んでいた〈事例12〉の話者（大正十五年生まれ）はお酒を供えるなどして祭つていたということであつた。

この話によく似た話型に、「杖桜」<sup>(31)</sup>の伝説がある。「杖桜」の伝説は、著名人が地面に立てた杖が後に大木となる話で、全国に分布している話型である。杖とする木は桜のほか、竹、梅、銀杏、杉など様々で、主人公は弘法大師、西行法師などの著名な人物である場合が多い。杖にした枝が大木になる点と日よけにした枝が大木になる点との差異はあるが、同類の話型と考えてよいであろう。暑いので帽子代わりに枝を折つて日よけにし、それが不要になつて地面に差したものが根付いて大木になつ

たとされている点に特徴があり、日差しが強い沖繩らしい話になっている点が注目される。この語りからは、春源がガジュマルの小枝を持って日よけにしながら歩いている様子が目に浮かぶようで、春源に親近感を覚える話となっている。

### Ⅲ 春源昇天伝説と墓の問題

次に、土原豊見親春源が亡くなった時の話をみてみることにする。島での調査中、次のような話を聞くことができた。

〔事例13〕「天に昇った土原豊見親」

土原豊見親（ぬたばるとうゆめ）といって、もうあの、門があるでしょう。入って行かれて、向こうの方に、段々、二段ぐらいかねえ、二段か三段か、石があつて、ここに乘つて、丸うく積まれた所があるさあね。向こうに香炉がある。大きい香炉があるさあね。向こうに、祭つておられるというけど、私なんか、土原（つちはら）部落で生まれたから、小さい時も向こうは木陰で、木がいっぱいあるから向こうで、子守して遊んだりして大きくなったけど。

で、話を聞いたら、土原豊見親といつてもう、これのあれで、八月踊りは何百年前からこんなやつていかどうかわからんけど、土原豊見親は、長（た）けた人で、おられるさあね。してあの、何ていうの、羽衣、小さい時、小学校の国語の本に習つたでしょ。羽衣、あの、奇麗な着物着けて飛んでね、天に。これみたいに、天に、飛ばれたと、その由来もあるけど。羽衣着ててじゃないけどよ、天に飛ばれたという、由来もあるけど。<sup>(32)</sup>

〔事例13〕は、土原豊見親が亡くなる際、天に飛んで行かれたという由来があるという語りである。多良間島には、〔事例13〕の語りのような、春源が死後天に昇つて行つたという伝承が確かに存在している。例えば、「土原は死期が近づいたのを知つた。しかし、彼には絶えず側付きの召使いがおつて自由には死ねないのを知つた。そこで土原は召使いに「食物が欲しい」と嘘をついた。召使いが食い物を持って来ると、土原は立つたまま死んでいた。そして召使いの目の前で、その骸は灰のようにならずれると、煙となつて空高くまい上つて行つた。後には何一つ残らなかつた。」<sup>(33)</sup>などの例である。〔事例13〕の場合は亡くなる際に天へ飛んで行つたと語られているが、この例では死体が灰のようにならずれて煙になつて空高く舞い上がつて行つたとされる。どちらの場合も、死後天に昇つて行つたため遺体が残らなかつたという点が共通している。この伝承は何を意味しているのだろうか。

なお、〔事例13〕の前半に語られているのは、春源が祭られているとされる石造の墓についての説明であるが、島ではウプメーカと称されている。しかし、天に昇つて行つたと伝承されているわけであるから、ウプメーカの中には何も無いことになる。このウプメーカについて、次のような話を聞くことができた。

〔事例14〕「土原春源の墓と寺山の流刑僧」

あれは、春源が、死後、寺山といつてそこに、村内に、あるんだけど。流刑になつて来たつて。坊主が。それで向こうに、岩の上なんか、して、やつてあるんですが。この坊主がですね、これは沖繩の、坊主で、流刑してる。当時の、坊主が、流刑になるとかあるいは取り立てられる。あるいは、坊主というのは当時はもう、王の、補佐役とか何とかさうい

ったような、位までいったと思うんですね。だから、流刑になって来たというのは、大変、重い、ことだと思っただけ。これはまたさらに、呼び戻されて、沖縄に行つて、奥武山（おうのやま）あたりの、坊主に、なっているんですね。この人が、死後、百年、ここの、墓は、造つてあるんです。土原豊見親の、墓は。で、多良間の言い伝えはですね、北方面の、山の中に埋められているとか何とか。ですけど、当時は、偉人の骨を持ってきて、煎じて飲んだり色々したら、偉人が生まれるとか。そういうなので、隠したんじゃないかと思っんですね。だから、どこに、本物の墓はあるのか、遺骨はあるのか、多良間村民も、まだわからないんです。へで、これは戦後ですね、昭和の十年頃に、学者が来て、ウプメーカというんですけど、ここの、墓は、骨もあつたんです。外からも見えた。石積みだから。私たち子どもの頃は見とつたんですけど。これを調べたらね、ほいたら、人骨じゃない、馬骨だった。馬の骨だった。この人が、言っているんです。<sup>34</sup>

〈事例14〉は土原春源の墓や遺骨についての語りである。ウプメーカは死後時間がたつて造られたもので、多良間の伝承では春源の遺骨は北方面の山の中に埋められているとも言われ、どこに本物の墓や遺骨があるのか村民もまだわからないという語りである。当時は偉人の骨を煎じて飲むと偉人が生まれるなどとされたので、遺骨を隠したのではないかということである。昭和十年頃に学者が来てウプメーカの骨を調べたら馬の骨だったという。〈事例14〉の話者が子ども時代に行われたという学者の調査とは、社会学者の河村只雄氏の調査とみられる。<sup>35</sup> 寺山の流刑僧とは、高僧心海のことである。心海は何らかの理由で多良間に滞在（島の伝承では流罪）していたようで、心海が住んでいたとされる「寺

山ウガン」（多良間村字塩川大道里三五〇）には「大清康熙四十」（一七〇一年）の年号が刻まれている石碑がある。ウプメーカには春源夫妻のものとしてされる二基のメーカ墓があり、一方に「四時康熙四〇天七月八日／土原豊宮靈位／末孫 春 敬白」、もう一方に「土原豊宮内室靈」と刻まれた墓碑がある。心海滞在中に春源七代目の子孫春遊が造つたものかと推定されている。春源七代目の子孫春遊の子どもであつた八代目春倫（一六九七〜一七六一）は、一七二一年（清・康熙五十）数え十五歳の時に島を離れて首里に登り、心海の世話で首里の中城御殿に八年奉公した後、一七一九年（清・康熙五十八）帰島している。

八代春倫が作成し、その後子孫が書き継いでいった運天家所有の「土原氏系図家譜正統」の冒頭には「吾元祖土原豊見親春源は、弘治年間之人也。其頃、八重山島大浜赤蜂兄弟及与那国之鬼虎、負己之武勇不随王化謀叛之時、随從忠導氏玄雅、到彼地、征罰逆彼。到中山、奉賀て玄雅使、元祖春源請為多良間島之主長、帰島云々。吾雖為八代之末孫為後世子孫依旧聞記謹て誌之」と記され、春源の項には「土原豊見親春源／童名字増呂／父母不知為何人子／尚真王世代／弘治年間、仲宗根豊見親玄雅隨從、到八重山島、追罰徒全帰島、嘉靖年間任多良間島主、雖然久遠故生卒不詳」（句読点原田）<sup>36</sup>と記されている。この家譜には、明の弘治年間（一四八八〜一五〇五）に仲宗根豊見親玄雅に従つて八重山の「赤蜂」と「鬼虎」を討伐した春源は、嘉靖年間（一五二二〜一五六六）に多良間島主に任命されたことが記されているわけであるが、「生卒不詳」としている。おそらく春源は、嘉靖年間の末頃までには亡くなつていたのではないかと推定される。そしてその子孫たちは、代々重職についた。多良間島では、春源は今でも英雄として語り継がれている。

大きな業績を残し、琉球王府にも認められた春源は、島の人々によって語り継がれるうちに神格化されてゆき、その結果、〈事例13〉のような土原豊見親が亡くなる際に天へ飛んで行かれたなどという伝承が生まれることになったものと推定される。〈事例14〉で語られているような、本物の墓や遺骨があるのか村民もわからないという状況も、春源昇天伝説を生み出す源の一つとなったのであろう。土原豊見親の「母親は、本当は産みの親でなく、育ての親だったらしいね。豊見親は天人という話だからね」<sup>(2)</sup>などという現代の語りも、春源昇天伝説と関係があると思われる。また、春源昇天伝説は、南西諸島各地に伝承されている天人伝説や道教の尸解仙の思想からも何らかの影響を受けているように思われる。

### 結 語

以上で、多良間島の土原豊見親の伝説についての筆者なりの考察を終えることとする。

ベーンズという人物を父に持ち、仲筋集落の八月踊りが行われる「土原ウガン」で出生したとされる土原豊見親春源は、幼名をウドウルといった。多良間島にはウドウル時代の伝説が多数伝承されており、ウドウル時代の多数の伝説には、少年時代から智恵と力に富む春源の様子が語られている。「ウドウルとカッジャンガペー」「ウドウルとタラマヤカラ」「ウドウルとパルマウプトウヌ」「水納ベーンズの刀とウドウル」「土原豊見親と塩川との戦い」などの伝説から、水納島を統治していたとされるおじの水納ベーンズの協力などを得ながら、パリマ村と争いパリマ村

を制圧してゆく様子がうかがえ、また、「ウドウルと闘牛」「ウドウルとイグントリナナツ」などの伝説から、フタツガー村と争いフタツガー村を廃村に追い込んでゆく様子がうかがえる。

島内を統一したウドウルはやがて成人して土原春源を名乗る。「土原春源のアカハチ・鬼虎征伐」「土原春源と首里王」「土原豊見親(抱護林、屋敷跡、碁盤目道路)」「ピトマタウガン」「土原豊見親とガジュマル」などの伝説から、宮古島のオヤケ・アカハチや与那国島の鬼虎の征伐軍に参加し、琉球王から豊見親の称号を得、島内を整備してゆく様子がうかがえる。また、「天に昇った土原豊見親」「土原春源の墓と寺山の流刑僧」など、春源が亡くなった後の話に語られている春源昇天伝説や墓の問題などから、島の人々によって語り継がれてゆくうち春源が神格化されていった様子がうかがえ、さらに南島各地の天人伝説や道教の尸解仙の思想からも何らかの影響を受けているらしいことが推定された。

多良間島には「土原豊見親ぬニイリ」という古謡が伝承されており、土原豊見親が宮古島や沖縄島に行つて公務をこなしたり、首里勢頭(国王)に会つて多良間全域の三原(仲筋・塩川・水納)の主となるよう命じられて多良間島を統治した様子などがうたわれている。このニイリ(神歌)は、土原御願や多良間神社の例祭、運城御嶽や泊御嶽のプーリ(穂礼祭)でもうたわれていたという。多良間島の御嶽の問題を考察する場合においても、土原豊見親の存在を抜きにすることはできない。

本稿では、多良間島を代表する英雄であった土原豊見親春源の伝説を中心に考察したわけであるが、多良間島の御嶽と土原豊見親春源との関係や、組踊「忠臣仲宗根豊見親組」をめぐる問題等、論究する必要のある課題は多い。残された諸問題は今後の課題としたい。



〔注〕

- (1) 拙稿「沖縄・多良間島の平家伝説」(「新見公立短期大学紀要」第二十五巻、二〇〇五・12) 参照。
- (2) 拙稿「沖縄・多良間島の嶺間按司伝説―神名遊びと話千両―」(「人文科学論叢」第三巻、二〇〇五・三) 参照。
- (3) 宮古諸島の多良間島・水納島(沖縄県宮古郡多良間村)での調査は、平成十六年(二〇〇四)九月に行つた。
- (4) 注1の拙稿「沖縄・多良間島の平家伝説」参照。
- (5) 話者は沖縄県宮古郡多良間村塩川の砂川長清さん(T11・10・20)。平成十六年(二〇〇四)九月二十四日・原田調査、採集稿。
- (6) 『多良間村の民話』(多良間村役場・一九八二)所収「宇増呂とカッジャンガペー」、二〇五〜二〇七頁。『多良間村史 第一巻』(多良間村・二〇〇〇)所収「土原宇増呂とカッジャンガペー」、四〇〜四一頁。上江洲均氏「多良間島探訪記」(「民俗」第二号、一九六〇・12、所収)、八頁。
- (7) 注6の『多良間村史 第一巻』所収「宇増呂とタラマヤカラ」、四一頁。
- (8) 注6の上江洲均氏「多良間島探訪記」参照。
- (9) 『沖縄県の地名』(平凡社・二〇〇二)、「多良間島」の項参照。
- (10) 注6の『多良間村史 第一巻』、二七〜二八頁。
- (11) 話者は注5の砂川長清さん。平成十六年(二〇〇四)九月二十四日・原田調査、採集稿。
- (12) 注6の『多良間村の民話』所収「土原豊見親と水納ペー刀」「塩川御嶽由来」「土原豊見親」、二〇七〜二一一・二六〇〜二六一頁。
- (13) 『多良間村史 第一巻』所収「宇増呂とパリマ大殿」、四七〜四八頁。
- (14) 注1の拙稿「沖縄・多良間島の平家伝説」所収(事例4)「水納ペー刀とウッドゥル」、注6の『多良間村の民話』所収「土原豊見親と水納ペー刀」「豊見親と波利間大殿」、注6の『多良間村史 第一巻』所収「宇増呂とパリマ大殿」、参照。
- (15) 話者は沖縄県宮古郡多良間村仲筋の高江洲良要さん(S3・11・4)。平成十六年(二〇〇四)九月二十四日・原田調査、採集稿。
- (16) 注6の『多良間村の民話』所収「イグントリナナツ」「フタツガイ村の話」、二一一〜二一五頁。注6の『多良間村史 第一巻』所収「宇増呂とイグントリナナツ」、四六〜四七頁。
- (17) 注6の『多良間村史 第一巻』所収「宇増呂とイグントリナナツ」、四六頁。
- (18) 外間守善・波照間永吉氏編『定本 琉球国由来記』(角川書店・一九九七)、四八一〜四八二頁。
- (19) (20) 注1の拙稿「沖縄・多良間島の平家伝説」参照。
- (21) 話者は沖縄県宮古郡多良間村仲筋の仲間三盛さん(S3・5・15)。平成十六年(二〇〇四)九月二十三日・原田調査、採集稿。
- (22) 話者は注21の仲間三盛さん。平成十六年(二〇〇四)九月二十三日・原田調査、採集稿。
- (23) 注6の上江洲均氏「多良間島探訪記」参照。
- (24) 桑江克英氏訳註『球陽』(三一書房・一九七二)、五三頁。
- (25) 話者は注21の仲間三盛さん。平成十六年(二〇〇四)九月二十三日

日・原田調査、採集稿。

(26) 『村の歴史散歩』(多良間村教育委員会・一九九五)、「抱護林」の項参照。

(27) 話者は注21の仲間三盛さん。平成十六年(二〇〇四)九月二十三日

日・原田調査、採集稿。

(28) 『多良間村史 第六卷』(多良間村・一九九五)の「ヒトマタウガ  
ン」の項、二二六頁。

(29) 注6の上江洲均氏「多良間島探訪記」参照。

(30) 話者は沖繩県宮古郡多良間村仲筋の高江洲ヒデさん(T15・9・  
10)。平成十六年(二〇〇四)九月二十四日・原田調査、採集稿。

(31) 稲田浩二氏・福田晃氏他編『日本昔話事典』(弘文堂・一九七七)、「  
杖桜」の項参照。

(32) 話者は沖繩県宮古郡多良間村塩川の上地トシコさん(S2・12・  
3)。平成十六年(二〇〇四)九月二十日・原田調査、採集稿。

(33) 注6の上江洲均氏「多良間島探訪記」参照。

(34) 話者は注21の仲間三盛さん。平成十六年(二〇〇四)九月二十三  
日・原田調査、採集稿。

(35) このウプメーカの骨の調査については、注6の上江洲均氏「多良  
間島探訪記」に「昭和十六年、この島に河村只雄氏が来てはじめて  
土原とその妃の墓を開いたが、妃の墓には骨が入っていたのに、土  
原の墓には骨らしいものは見当らなかつたという事である」という  
報告がある。

(36) 『多良間村史 第二卷』(多良間村・一九八六)、六四～六八頁。

(37) 注6の『多良間村の民話』所収「宇増呂とカッジャンガペー」、二

〇六頁。

(38) 『多良間村史 第六卷』(多良間村・一九九五)、三四三～三四七頁。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会平成十六年度～十八年度科学研究費・基盤研  
究C・研究課題「南西諸島における豪族伝説の調査研究」の成果の一部  
である。

連絡先・原田信之 教養科

新見公立短期大学 〒七一八―八五八五 新見市西方二六三―二

(二〇〇六年十一月七日受理)

「沖縄・多良間島の土原豊見親伝説」

## **Legends of NUTABARU-TOYUME in the Tarama Island**

Nobuyuki HARADA

The Department of Liberal Arts, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

### Summary

The Tarama Island belongs to Miyako Islands in Okinawa Prefecture. In the Tarama Island, there was a hero named NUTABARU-TOYUME that had ruled the island in the 16th century. The meaning of TOYUME is a local head of ancient Miyako Islands. There are a lot of historic sites and legends that relate to NUTABARU-TOYUME in the Tarama Island. NUTABARU-TOYUME was called UDURU in his childhood. It is told that UDURU united villages of Tarama island as a result of the battles. NUTABARU-TOYUME participated in famous wars of the 16th century. One was a war that subjugated OYAKE-AKAHACHI. The other one was a war that conquered ONITORA. NUTABARU-TOYUME played a major role in these two wars. King SYOSHIN ordered the government of Tarama Island to NUTABARU-TOYUME. NUTABARU-TOYUME did a lot of work with Tarama Island. In Tarama Island, NUTABARU-TOYUME is still respected.

Key words: NUTABARU-TOYUME, Tarama Island, heroic legend